或問 WAKUMON 35
No. 1（2000）, pp.35～52

『江鮑笑集』の言葉
——1940年代上海話芸の一端——

西山美智江

提要

『江鮑笑集』是 1940 年左右出版的一本独脚戏戏本。内有很多苏州话，可以说是一种老苏州话的资料。但里面还有上海话，绍兴话，宁波话，官话等其它方言。本文的第一个目的是调查苏州话与上海话的语言接触过程，其次考证吴语给官话的影响，最后举出关于新名词的一些例句。

0. はじめに
1. 呉語
2. 官話
3. 新語
4. おわりに

0．はじめに

0.1 作者について

『江鮑笑集』（1941 年再版）は、1920 年代から 40 年代にかけて上海で活躍した芸人江笑笑とその相方鮑楽楽の残した独脚戯（滑稽戯）の台本である。初版の出版年や出版社については未詳。本来第一集から四集まで出版される予定であったが、第三集と四集は植字に回されていたものの戦火に遭い消失、現存するのは第一集と二集のみである。[1)]

江笑笑は杭州の生まれ、他に文彬という号もあるが、本名は未詳。彼は大学を出ており（工業専門学堂）、相方の鮑楽楽はその同級生で 2 人は在学中からすでに舞台に立っていた。卒業後春声社という文明戯劇団に参加する。文明戯とは清

末民初に生まれた現代劇の一種で、その内容は主に社会情勢を反映させた即興劇であったが、その劇団員の多くは「隔壁戯」（ものまね、演技者は姿を見せずに行われる）や「双簧」（二人羽織、実際に話すのは後ろの人物）といった民間芸能の使い手であり、劇の前にはそれら演芸も行われていた。彼らも杭州の演芸場「大世界」で「双簧」を演じている。

1927 年 2 人は上海に進出。大馬路（南京東路）にあった永安公司の屋上演芸場「天韵楼」に出演した。つづいて同じく大馬路の娯楽場「新世界」に登場すると、ここで自らの芸を「蹺蹺戯」と称した。彼らは「独脚戯」を公称した最初の芸人なのである。[2)]

その後 2 人は、王無能、劉春山らと独脚戯団「五福団」を結成する。彼らはみな各自文明戯団に所属しつつ、独脚戯の芸人として一世を風靡していく。その活躍の場は演芸場や堂会にとどまらず、ラジオや映画にも進出した。彼らの出演した映画には『到上海去』、『鶏鴨夫妻』などがある。[3)]

のちに江笑笑は、王無能や劉春山がそれぞれ滑稽京劇や時事ネタなど「唱詞」を得意としていたのに対し、次第に演芸よりも劇団活動に熱中していく。上海で最初の滑稽劇団「笑笑滑稽劇団」を旗揚げし、そこで喜劇を上演していたようだ。残念ながら彼のオリジナル作品の多くは失われた 3，4 集に収められており、現在は見ることが出来ない。その後様々な滑稽劇団が登場し、「滑稽戯」ブームが起こる。ここでも「滑稽戯」という名称を最初に使用したのは江笑笑であり、彼のネーミングの上手さがうかがえる。

こうして江笑笑はその活躍ぶりや、100 を超える作品の多さ、弟子の数、どれをとっても押しも押されぬ「独脚戯」の第一人者となっていった。そんな彼がなぜ『江鮑笑集』を出版しようと考えたのだろうか。上海では 1937 年から戦火のあおりを受け、一部のラジオ局が自主的に放送を停止していた。このような社会情勢の中、多くの芸人が上海を離れた。江も減収の憂き目に会った事だろう。その穴を埋めるべく本の出版が考えられたと想像される。しかし一方で江笑笑の経緯を考えれば、「独脚戯」の頂点まで上り詰めた男が己の作品を活字として後世まで残したいと考えたとしても、不思議ではない。そして彼はまるで自分の死期を予感していたかのように、出版の数年後 1946 年にその生涯を終える。[4)]

0.2　内容について

『江鮑笑集』第一集は「笑話」39 篇、「唱詞」12 篇、第二集は「笑話」33 篇、「唱詞」20 篇を収録している。（但し第一集の「唱詞」1 篇、第二集の「唱詞」18 篇は現在入手している本では破損していて見ることができない。）

その内容を大まかに分類してみると以下のようになる。

- 戯曲や小説などを題材としたもの；滑稽三国志、二十五孝、乾隆上山など
- 商売人もの；紹興教書（家庭教師）、傘命之誤（代書屋、文字占い）など
- 方言もの；山西皮貨（北方語）、明倫堂（杭州語、寧波語、蘇州語）など
- 金銭、賭事に関するもの；債精老祖、麻雀大亨、狗推牌九など
- 田舎者を嘲るもの；郷人扁担、要吃耳光など
- 言葉遊び、とんち；廟鈴対口、測量天高など

「笑話」は全て江笑笑と鮑楽楽の掛け合いで、「唱詞」は江が一人で歌うものもあれば、2 人で歌うものもある。いずれにせよ集団で上演された形跡はない。中身も既存の作品を独脚戯用に改編したと思われるものが多い。例えば「学生偸酒」は日本の一休さんに似ている。和尚さんが食べてはいけないと言った飴をなめて死のうと思ったという話とそっくりで、和尚さんは医者に、飴は赤と白の玫瑰酒になっている。この他珍しい所では、モーパッサンの作品を改編したと言われる「失落項圈」がある。これなどは知識人の面目躍如であろう。また時代性を感じるものとして、話のまくらや結びとして識字運動への参加、青少年に対する遊興の戒め、農村での水害援助等の呼びかけを行っている。

> 我到如今末常常懊晦从前勿读书。要是多读点书，那能会拔厨子看轻呢？所以我要劝劝全国同胞，趁识字运动个当口，快点去读书吧！少年不努力，老大徒伤悲。大家一齐起来读书要紧吓！（绍兴教书 79）
>
> （僕は今になって勉強しなかった事をいつも後悔してるんだ。もし勉強してたら、料理人にばかにされる事もなかっただろう。だから皆さんにおすすめします、識字運動の機会に、早く学校に行こう！若いときに努力しないと、年をとっていたずらに悲しむといいます。みんなで立ち上がろう、勉強が肝心だ！）

0.3　言葉について

本書の言葉は蘇州語の特徴をよく備えている。恐らく蘇州の「評弾」の言葉に

最も近いのではないかと思われる。彼らの活躍の場は上海であったが、上海語の特徴は同年に出版されたブルジョワのものと比べても少ない。しかし全くない訳ではなく、例えば共通語の“你”にあたる言葉に蘇州語の“倷”を用いたり、上海語の“侬”を用いたりする。このように蘇州語と上海語の両方を用いる事例は、言語接触という観点から見ておもしろいと考えられるので、「§1 呉語」で数例取り上げてみた。

また本書では蘇州語、上海語以外に、杭州、紹興、寧波、揚州といった江南地区の方言が登場する。これは講釈師が話の中の人物が使っている中国各地の方言の真似をしなければならないとされたのと同じで、独脚戯の芸人も巧みに方言を操った痕跡である。今回は上に上げた蘇州語と上海語のように、方言が自分の言葉の中にとけ込んでしまった事例にしぼって考察したので、個別の方言については取り上げていない。

江南方言とはまた別に官話もよく用いられる。個人的に官話とは一体なんなのか以前から興味を持っているのだが、一つには「交際語」という面があったのではないかと考えている。[5)] 上海という大都市、国際都市には様々な民族、様々な地方出身者が集まり生活していた。「普通話」ができる以前、民国期にも上海独自の「共通語」が存在し、それはおそらく「上海官話」と呼ばれていた、という推論を以前たてた事がある。それで本書に用いられる官話にも、芸人の話す官話ならば、ある程度の聴衆は聞いて理解できることが前提になると考えられるため、「上海官話」を補う資料として「§2 官話」で数例取り上げた。

同じく「上海官話」を扱うなかで、「新語」がかなり大きな比重を占めることが分かった。外国から輸入された目新しいものが上海から中国各地に広まる際、上海語の音訳語があてられたものも多い。「新語」に関しては現在その語源に関する研究が盛んに行われているが、本書にも本文中や欄外の広告に幾つか「新語」らしいものがある。「§3 新語」で幾つか例示しておく。

1．呉語

1）人称代詞

普通話：	我	我们	你	你们	他（她）	他们
江鮑：	我	伲	倷	倍笃	俚	俚笃

阿拉　依　亻那　俚倷　伊笃
我伲　　伊
　　其

これらを A「蘇州語、上海語に共通のもの」、B「蘇州語」、C「上海語」の 3 つに分ける。

A：我，伲

B：倷，亻吾笃，俚，俚倷

C：阿拉，我伲，依，亻那，伊，其

前述の通り、“你”にあたる言葉には蘇州語の“倷”と上海語の“依”の両方が用いられる。数の上では“倷”が圧倒的に多いが、“依”も少なくない。私が気づいたところで第一集に 36 例、第二集に 49 例あった。この“依”の用例は次の三点にまとめられる。一つは方言としての用例である。それは上海語としてではなく紹興や寧波の方言として用いられ、最も数が多い。

汤先生说，依去请到里头来。（绍兴教书 70）

（湯先生は言った。お前が行って中にお連れしろ。）

この湯先生は紹興の人で、この人のせりふでは全て“你”は“依”になり、第一集のうち半数以上の 20 例がこの話にでてくる。

阿拉宁波人，顶顶忌骂奴才。依到拔我去问问其看。（明伦堂下 192）

（私ら寧波の人は、「奴才」と罵られるのが最も嫌い。君、私がやつに聞いてやろう。）

この第二集「明倫堂」では寧波人だけでなく、第一集と同じく紹興人も出てくるが、この人も同じように“依”を使い、第二集の三分の一に近い 15 例がこの話に出てくる。

二つ目に、田舎者（要吃耳光）、妻（失落項圈）、息子（想妻做詩）、学生（紹興教書）、ボーイ（滑頭国）といった一種見下した相手に用いられている用例がある。これが次に多く、一、二集あわせて 26 例見える。以下の例はボーイに対して言ったものである。

等伲点好子喊依。（滑头国・中 52）

（我々が注文を決めてからお前を呼ぶ。）

三つ目が、江笑笑と鮑楽楽の 2 人がお互いに相手を呼ぶときで、この場合“倷”

と“侬”の違いはほとんど感じられない。

现在先问侬，唱独脚戏之前，侬做啥生意？（伞命之误 148）

（今まず君に聞くが、独脚戯をやる前は、君はどんな仕事をしてたんだ？）

一つ目と二つ目を見ると、彼らにとって“侬”は蘇州語ではないどこかの「方言」であり、「上品な」蘇州語と比べて「下品な」ものだったのではないだろうか。そして奇妙なことに、その「下品な」方言は次第に彼らになじんでいくように感じられる。第一集と第二集の時代関係は定かではないが、もし創作された年代順に収められたとしたら、第一集よりも二集の方が数が増えているのは彼らがより“侬”を受け入れていった過程と見ることもできそうだ。この「悪貨が良貨を駆逐する」的な現象は社会言語学的にみても、そう珍しくはないであろう。

同じような事が“我们”を表す“阿拉”についても言える。この“阿拉”はよく知られるように元は寧波語だが、現在は上海語になっている。“阿拉”について、1941 年に出版されたアルベール・ブルジョワの *Grammaire du Dialecte de Changhai* では「下層階級」の言葉と説明している。当時上海にいた寧波人の多くは召使いやボーイなど下層の職業に従事していたためと思われるが、ここでも「方言」＝「下品なもの」という図式が人々の間にあったのだろう。なお『江鮑』にも“阿拉”の用例が 10 例あり、そのうち 4 例は寧波人がしゃべったものであるが、そのほかは自分たちの言葉として使っている。

呒不面孔见阿拉百姓，所以面孔浪套一个夜壶脸？（吃看加官 123）

（僕ら庶民に合わす顔がないから、汚い顔をしてるのかい？）

本書で“我们”を表す言葉として最も多く用いられるのは“伲”であるが、これと“阿拉”以外にもう一つ、古い上海語の“我伲”も用いられる。用例は 6 例しかないため、はっきりとした特徴はとらえがたい。しかし次の例は架空の国「滑頭国」を旅行した主人公 2 人が、その国の人に対して言ったもので、尊大な語気が感じられる。

我伲是大中国人！（滑头国・中 55）

（我々は中国人であるぞ！）

“你们”を表す言葉も、基本的には蘇州語の“𠮷笃”を用い、上海語の“𠮷那”が用いられるのは 7 例と少ない。以下の例は田舎の人の発言である事が注目される。

乡下人勿领盆说，仔那缘当我屈死。（乡人扁担 89）

（田舎者は納得せず言った、お前ら俺をばかにするな。）

“他”を表す言葉も同じく蘇州語の“俚”，“俚倷”を多く用い、上海語の“伊”は 10 例とこれも少ない。以下の“伊”はインド人を指す。

伊说倷格大号阿是叫笑笑？（梦招女婿 10）

（そいつはあなたの号は笑笑ですかと言った。）

この他興味深いものとして、“伊”と蘇州語の接尾辞“笃”が組合わさってできた造語のような“伊笃”が 1 例見られる。以下の“伊笃”もインド人を指す。

伊笃说勿错格。（梦招女婿 11）

（やつらはそうだと言った。）

2）指示代詞

普通話：这个

江鮑：格格，笛格

A：格格

C：笛格

『江鮑』の指示代詞はほぼ“格～”（kaʔ）で表される。しかし『江鮑』では構造助詞の“的”にあたる言葉にも同じ“格”を用いる事から、実際意識されていた音は（gəʔ）と考えられる。これは現在では“掰～”（gəʔ）と記されるものと同音である。“笛～”（diəʔ）は、「老派」上海語で“这～”を表す“迭～”（dieʔ）に音が近い。しかし同年に出版されたブルジョワではさらに古い上海語である“第～”（di）、を用い、“笛格”或いは“迭个”は見えない。もしこの“笛格”が“迭个”であるとするならば、“阿拉”と同じくこの時期上海語に入りつつあった言葉であり、ブルジョワはこれを方言と感じたため取らなかった可能性もある。

“笛格”の数を見ると第一集では 7 例、二集では 20 例とこちらも“侬”と同じく二集になって増えている。使い方には“侬”ほど目立った特徴はないが、先に挙げた例と同じく「滑頭国」の人の言葉として 3 例見える。

先生笛格是饭，勿是粥。（滑头国・上 39）

（お客さんこれはご飯です、粥ではありません。）

ところで『江鮑』には“那～”にあたる遠詞が見られない。『普通話対照上海

語蘇州語学習と研究』によれば、蘇州語の“辏～”は、遠近両指に用いられるとある。蘇州語にはこの他にも幾つか指示代詞があり、遠近の区別をするものもあるようだが、『江鮑』ではそれらを用いた例は見つからなかった。なお『上海話語法』によれば上海語も本来は遠近の区別をしないとあり、この事と関係があるのかもしれない。同じく『上海話語法』によると、ブルジョワやエドキンスらが遠近の区別をしているのは、西洋言語の影響という。

3）疑問代詞

普通話：	哪儿	什么地方	怎么	多少
江鮑：	落里	啥场化	那亨	几化
	那里	啥地方	那能	多少

A：几化

B：落里，啥场化，那亨

C：那里，啥地方，那能，多少

“落里”は4例、“那里”は1例と数が少ないため、はっきりとした違いはわからない。“那里”はエドキンズやブルジョワにあるように（fiali）と発音し、現代上海語の“鞋里”にあたる。

（乙）逃到落里？（甲）逃到杭州有个寺。（水果笑话 10）

（乙；どこに逃げた。甲；杭州のある寺に逃げた。）

（乙）第二只码头那里？（甲）湖州府.（上滑油山 111）

（乙；次の町はどこだ？甲；湖州府さ。）

“几化”は7例、“多少”は3例とこちらも用例が少ない。

妮子今年几化年纪？（想妻做诗 152）

（息子は今年いくつだね。）

问我要多少？我说借一百只洋。（倒贴利钱 135）

（俺にいくら欲しいのだと聞くので、100元貸してくれと言った。）

この他“啥场化”と“啥地方”を比べると“啥地方”が圧倒的に多く、“那亨”と“那能”を比べると“那能”が圧倒的に多い。つまりここでは上海語が蘇州語よりも多く用いられており、興味深い。

到啥场化去饯行，阿是酒馆里？（水果笑话 3）

（どこで送別会をしたんだ、酒楼かい？）

（乙）到啥地方？（甲）到堂子里。（水果笑话 3）

（乙；どこに行ったんだ？甲；妓楼だよ。）

倷晓得那亨困法？（自尊自贵 117）

（君はどんな寝方かわかるか。）

格末那能办法？（水果笑话 11）

（ではどうする。）

4）構造助詞“得”

A：得

C：来，得来

“来”についてエドキンズは「教養のある人は“来”を用いず“得”に代える、しかし下層階級では非常に普及している。」と説明する。“得”が官話から呉語に入ったものであるため、そう感じたのであろう。ちょうど“阿拉”とは逆を行く感じである。“来”，“得来”の用例は少なく、“得”が最も多く用いられる。

（乙）另外有毛病格书还有伐？（甲）有！多来邪气。（书中有病 26）

（乙；他に病のある本はあるかい？甲；あるさ！すごくたくさん。）

黎山老母哭得来眼睛像胡桃相仿。（特别三国 22）

（黎山老母は泣いて目がクルミのようです。）

5）没有

B：呒不

C：呒没，呒

“有”の否定には、ほぼ蘇州語である“呒不”が用いられ、“呒没”は 5 例、“呒”は 8 例見られた。

人人才有雨伞，则我呒没雨伞。（伞命之误 149）

（人はみな傘をもっているのに、私には傘がない。）

上の例は田舎にいる両親への言づてを頼む場面である。

呒生意末，爽爽快快说是呒生意。（稽查造人 23）

（仕事がないなら、はっきりと仕事がないと言えよ。）

6）諾否、反復疑問

B：阿～？

C：～伐？ ～勿～？

上海語の語気助詞“伐”を用いる例はたくさん見られる。蘇州語の語気副詞“阿”を用いる疑問文に比べれば少ないが、かなり浸透していたようだ。

还有一本神童诗，倷读过伐？（书中有病 27）

（ほかに神童詩があるけど、君は読んだことあるかい。）

反復疑問文も 50 例近く見られる。本来上海語にはない疑問文であったが、官話や紹興、杭州方言の影響と言われる。[6)]

倷格个朋友到底有勿有呢？（债精老祖 46）

（君のその友人は結局持っているのか。）

2．官話

本書に見える官話の特徴の一つは、呉語の影響が強いという点である。ここでは呉語的な部分に関して、幾つか事例を挙げてみた。

a．語彙

1. 出毛病：发生意外。（火车底下摆了铺盖网蓝，反而稳当得很，决不会出毛病。：头可放大 104）
2. 拉车子：拉车的。（我们几个拉车子有规矩的。：头可放大 104）
3. 事体：事情。（随便什么事体，专门说谎话。：常熟二爷 173）
4. 物事：东西。（要说两样物事，亦要白，亦要圆。：公公扒炭 132）
5. 洋钱，洋钿：钱（你有了洋钱，岂不是什么都解决了。：上滑油山 110）
6. 淌：次。（格趟总要窝脚了，瓜不是圆的。：公公扒炭 134）
7. 龌龊：脏。（你这种龌龊的东西推出来。：垃圾吐痰 193）
8. 会得：会。（自然会得有人来问你的。：上滑油山 109）
9. 拔：给。（马上就有人，拿洋钿拔你。：上滑油山 109）
10. 回转来：回来。（现在你过了多天，才回转来。：公公扒炭 130）
11. 晓得：知道。（不过你的知识是我晓得的。：公公扒炭 130）
12. 吃酒：喝酒。（所以只好在房里请你们吃杯酒。：公公扒炭 132）

13. 爷: 父亲。阿爹: 祖父。（刚才我叫你三声爷，现在你要叫我三声滴滴亲亲的亲阿爹。: 元和教歌 138）
14. 脱: 掉。（我把猴子卖脱了。: 元和教歌 143）
15. 个: 的。哉: 了。（热闹个地方就要到哉。: 常熟二爷 174）
16. 该: 拥有。（你牛到该了不少。: 清官瘟官９１）

ｂ．文法

１）～５）は呉語の文法が直接官話の文中に見られるもの、６）～８）は呉語を官話に翻訳した結果作られたものである。

1）　形容詞＋“不过”；程度の高さを表す。

为子苛捐杂税厉害不过，所以不得不想法子。（滑头国・中 55）

（税金の取り立てがあまりにもきついので、工夫しないといけないのです。）

2）動詞＋“看”

動詞の重ね型や動詞フレーズの後に用いられ、「～してみる」を表す。普通話よりも使用範囲が広い。

唱给我听听看。（上滑油山 107）

（歌って聞かせてみなさい。）

3）動詞＋目的語＋“不”＋補語

白話文に見られる語順であるが、現代呉語でも用いられる。

看你不出。（山西皮货 114）

（そうは見えませんね。）

4）“可曾”；普通話の「動詞＋“了没有”？」に相当する。

三样东西可曾办到？（清官瘟官 99）

（３つのものは準備できたか。）

5）“问”；介詞で、“向”に相当する。

哑巴肚子饿，问你们先生要个铜板。（元和教歌 142）

（おしは腹が減りました、旦那様方お金を下され。）

6）“把”；以下4種類の用法があり、呉語の“拔”を翻訳してできたものと考えられる。

a 動詞、“给”； 我现在把你一块钱打一条。（滑头国・中47）
（私は今あんたに1元払って一つ謎解きをする。）

b 補語、“给”； 这包袱交把你。（上滑油山109）
（この風呂敷包みをお前にやろう。）

c 介詞、“给”； 好，把你想个法子吧。（上滑油山108）
（よし、お前をなんとかしてやろう。）

d 被動文、“被”； 把外国人晓得又要赔偿损失。（元和教歌143）
（外国人に知れたら、また損失を賠償しなければならない。）

7）“在那里”

『呉語読本』によれば、動作の進行、持続を表すとき、呉語では“勒海”等の虚詞で表す。これらの言葉は動詞“勒”と場所を表す“里”，“笃”，“哈”，“浪”などが結合してできたフレーズであり、これを翻訳したものが“在那里”となる。

a 進行； 不像在那里吃鸦片烟。（稽查造人28）
（阿片を吸っているのではなさそうだ。）

b 持続； 你们坐在那里的两只凳子，坐满一个屁股，一角钱凳子捐。
（滑头国・中54）
（お二人が座っている椅子ですが、お尻いっぱいに坐ると、1角の椅子税がかかります。）

8）“什样”，“什么样”

“怎样”，“怎么样”の意味で“什样”，“什么样”が用いられる。これは『白話語彙の研究』にあるように、呉語の“啥”が“什么”であると同時に“怎”であるため、このように翻訳されたものと考えられる。また“什么”を“怎么”の意味で用いる場合が多いのも同じ理由であろう。

活人什么会把死人压住？（元和教歌138）

（生きてるやつがどうして死人を押すのか。）

后来什样？（不离本行 167）

（それからどうなった。）

岳父大人，你的病体什么样了？（不离本行 166）

（お父様、ご病気の具合はいかがですか。）

3．新語

語史のなかで新語を扱う場合、一つにはいつ頃生まれ、いつまで使われたかを知る必要があるだろう。本書は民国末という比較的今に近い資料であるので、新語の発生を知るにはあまり適当ではない。ただ清代にできた言葉で、現在は別の言い方が定着したものも、この頃までは使われていたことを知ることができる。また方言として残ったものも幾つかあるので別に挙げておいた。尚、ここに挙げた例文は、呉語と官話の両方を用いている。

a．現在は用いられないもの。

（1）传声机；マイク

江笑笑特备放大传声机出租　能播音乐唱片及来宾演说　发音宏亮特派专员服务取费低廉　如欲租者请拨电话 88385（广告）

（江笑笑は拡声マイクの貸し出しをご用意しました。楽しいレコード、来賓の講演の放送に利用できます。音は明瞭、係りの者を派遣し価格は良心的です。借りたい人がありましたら 88385 までお電話下さい。）

（2）电气灯；電灯

譬如先起头电气灯，收梢要用汽油灯。（风吹不动 178）

（例えばまず始めが電灯だったら、終わりにはガス灯を使わないといけない。）　同じような形態として現在では“电炉”と表記する電気ストーブを、“电火炉”と表記する例も見られる。3．2の4）に同じ。慣用化されて省略される前の過渡的な呼び名であろうか。

（3）密斯；miss

格大小姐，可以算得全新格摩登密斯。（诗门头 81）

（このお姉さんは、全く新式のモダンミスだな。）

（4）美术思想; 芸術的

一点呒不美术思想，人家看见子个个讨厌。（棺材楦头 119）

（ちっとも芸術的でなく、見る人はみないやがる。）

（5）新潮流；新しい流れ

格种新潮流格新时代大小姐阿好等到廿几岁格咯？（诗门头 81）

（この新しい流れ新しい時代に女が二十幾つまで待てるかね？）

（6）新闻报；新聞

现在存银行几化危险！倷到新闻报浪看看看，只看见东一爿银行清理，西一爿银行关门。（倒贴利钱 210）

（今銀行に預けるのはえらく危険だ。新聞を見てみろ、やれ某銀行は清算だ、某銀行は倒産だときた。）

b．現在では方言として残っているもの。

（1）白塔油；バター

白塔油蛋糕到好哉，我大菜馆里，常常勒浪吃格。（梦招女婿１４）

（バターケーキなら良かったんだ、僕は洋食屋でいつも食べてるからね。）

1913 年に同じ上海で出版された『New Terms for New Ideas』では、バターの訳語に“奶油”“黄油”を用い、1931 年に上海で出された *Mathews' Chinese-English Dictionary* でも“奶油”を用い、“白塔”は用いられない。なお現在の呉語では“白脱”の字があてられる。また“蛋糕”だが、*Mathews* には“鸡蛋糕”と記載される。

（2）打弹子；ビリヤード

我是说弹子房里打弹子格弹。（公公扒炭１３３）

（私が言ったのはビリヤード場のビリヤードの球です。）

（3）汽油灯；白熱ガス灯

例文はａ（1）に同じ。

（4）水门汀；セメント

我个店只有水门汀，没得房子格。（钱粮要完２９）

（僕の店はセメントだけ、建物はないんだ。）

（5）忽浴缸；バスタブ

格是好住头等房间哉。电灯铜床，忽浴缸，抽尿马桶，电火炉。（狠人凶人 215）

（それなら一等室に泊まれる。ライトのついた真鍮のベッド、バスタブ、水洗トイレに、電気ストーブだ。）

現在では“浴缸”と表記される。*Mathews* では“浴盆”と記載される。

（6）照相；写真

俚拿子一张照相拔我看看。（梦招女婿 10）

（彼は一枚の写真を僕に見せたんだ。）

（7）自来火；マッチ

大老爷要吃香烟，搭俚划划自来火。（常熟二爷 169）

（旦那様がタバコを吸うときは、マッチを擦って差し上げる。）

c．現代語とほぼ同じもの。

（1）冷气；冷房

屋里向电风扇开开还嫌比热，装只冷气还嫌比热。（吃看加官 125）

（家で扇風機をつけてもまだ暑がり、冷房をつけてもまだ暑がる。）

（2）巧克力；チョコレート

立鶴牌　花生巧克力　味美芬芳（广告）

（立鶴ブランド　ピーナッツチョコレート　美味良香）

『New』では“初高辣”というより音訳に近い表記を用いる。

4．終わりに

本稿ではまず、蘇州語と上海語の両方が用いられる語彙について、幾つか考察を試みた。その結果上海語の語彙が次第に彼らに溶け込んでいく過程を見ることが出来た。一つの方言を話していた人間が、次第に別の方言を取り入れていく過程を示す資料として、大いに価値があると思われる。本書には本稿で取り上げた以外に、いくつか上海語と思われる副詞も見られる。[7] 今後更に調べていきたい。

次に官話に見られる呉語の影響について取り上げた。この他いわゆる「下江官話」の特徴も幾つか見える。[8]「上海官話」とはこのように「下江官話」に呉語の要素が組み合わせられたものであったと考えられる。つまり彼ら上海人にとっ

て「官話」とは「北方官話」ではなく「下江官話」であり、山西省から来た商人も、北方から来た役人もここでは「下江官話」を話す事になる。但し西山 1995 で扱った『商界現形記』と比べると、本書の官話は用例の少なさもあるが、呉語語彙の使用が目立ち、官話とも呉語とも判別つきがたい場合が多かった。実際の音が分からない以上何ともいえないが、「上海官話」と一口に言っても、話す人間、特に階層によってかなり異なっていたのかもしれない。

最後に新語をいくつか挙げてみた。呉語を発祥の地とする新語の研究に役立てていきたいと思う。

本書にはこの他、早口言葉や乞食歌、麻雀や牌九の様子なども登場する。様々な面でおもしろい資料と言えるだろう。

注

1)　『相声史雑談』p.147

2)　『相声史雑談』によれば、王無能が 1917 年に堂会で上演した「各地堂倌」が独脚戯の始まりとされる。

3)　映画の出来た年や制作事情については、未だ調べていない。第二集に「哭鄭正秋」という明星影片公司の映画監督であった鄭正秋の死を悼む歌があり、両者にかなりの親交があった事が推測される。或いは彼の作によるものかもしれない。ちなみに江本人が同じ第二集の「滑稽道中開篇」で、この映画はかなり当たったと述べている。

4)　『相声史雑談』p.147

5)　「商界現形記の言語」p.88

6)　『上海話語法』p.294

7)　“邪气”（＝很），“一塌糊涂”（＝得很），“多少”（＝多么）等が用いられる。

8)　動詞“有”の否定“没得”を用いる，助動詞“会得”を用いる。包括形一人称複数“咱们”を用いない，禁止の副詞“别”を用いない等。

参考文献

A. H. Mateer, 1913. *New Terms for New Ideas.* A Study of the Chinese Newspaper, Shanghai, Presbyterian Mission Press.

Albert Bourgeois, 1941. *Grammaire du Dialecte de Changhai* ,Imprimerie de Tou-Sè-Wè.

Joseph Edkins, 1868. *A Grammar of Colloquial Chinese*, as exhibited in the Shanghai Dialect, Shanghai, Presbyterian Mission Press.

R. H. Mathews, 1931. *A Chinese-English Dictionary* Compiled for the China Inland Mission, Shanghai, China Inland Mission and Presbyterian Mission Press

金名 1983　『相声史杂谈』福州：福建人民出版社

柯兆银他 1998　『上海滩野史』南京：江苏文艺出版社

李荣他 1993　『蘇州方言詞典』現代漢語方言大詞典・分巻南京：江蘇教育出版社

同上 1997 『上海方言詞典』同上

宮田一郎他 1984 『普通話対照 上海語・蘇州語—学習と研究』東京：光生館

钱乃荣 1997 『上海话语法』上海：上海人民出版社

石汝杰 1996 『吴语读本』東京：好文出版

西山美智江 1995 「『商界现行记』の言語」『中国語研究』第 37 号 pp.86-97

熊月之他 1997 『老上海名人名事名物大观』上海：上海人民出版社